



『ニルスの国の 認知症ケア』

藤原 瑠美 著

ドメス出版
本体 2700 円 + 税

「介護の社会化」を目的に2000年から介護保険制度がスタートした日本では、今なお家族の負担が大きく、介護殺人のような極端な事件も起きている。とくに、長期にわたることが多い「認知症ケア」を在宅で続けることは簡単ではない。そこで、近年、医療・

介護などを一体的に提供する「地域包括ケアシステム」の構築が目指されている。

本書は、介護資源が少なかった1990年から在宅で母親の介護を体験した筆者が、認知症ケアの家族当事者として当時、接した北欧の高齢者ケアに魅了されたこと

から次の二つの課題を設定し、調査を実施している。

まず、一つ目は、スウェーデンではなぜ認知症の人が一人暮らしを肯定的にできるのか、である。二つ目に、スウェーデンの認知症ケアにおける「医療と介護の役割分担」を明らかにすることであった。本書「ニルスの国の認知症ケア」は、まさに以上のような問題関心から、2005年からスウェーデン・エスロプ市の現場で定点観測を続けてきた内容をまとめた類まれな研究成果である。

本章は、次のような7章から構成されている。

第1章では、デイサービスを中心に、利用中のゲストが輝き続けるために、どのような工夫がされているかについてまとめている。デイサービスの建物や環境などのハード面とプログラム内容や介護職の接し方などのソフト面から具体的なエピソードをあげながらまとめている。

第2章では、在宅で暮らす認知症高齢者への認知症チームの支援内容やその関わり方が具体的に紹介されており、スウェーデンでは、なぜ認知症でも一人暮らしができるのかについての理解が深まっている。

第3章では、スウェーデンの認知症に関する制度・政策の変遷についてまとめ、さらに2010年に刊行された「認知症の医療とケアの国家ガイドライン」に示された16項目についても紹介されている。

第4章では、スウェーデンでも昔、精神病院に認知症の者が入院していたことや、プライバシーがなく看護師の眼が行き届くことを最優先していたつくりとなっていたこと、その精神病院の解体とグループホームの誕生についてまとめ、それとは逆に日本の精神病院に認知症の高齢者が増え続けている現状を指摘している。

第5章では、基本的な医療制度や認知症ガイドラインから認知症と医療の関係、認知症専門医の役割について整理している。

第6章では、認知症は家族の病気と言われていることや、妻が夫を介護している「沈黙のケア」、家族介護者への支援内容が紹介されている。

第7章では、筆者の体験から「節目の対話」というケア会議を提案し、また看取りをめぐるチームケアについてのべている。

筆者は、前述した二つの課題の答えを探るために、スウェーデンのケア現場における事例を交えながら、その実態だけでなく、政策的な特徴や自治体のサービスなどについても紹介している。それらは、日本の認知症ケアをめぐる政策や現場での実践課題を考えていくうえで、大いに参考になるにちがいない。